

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：鈴木 理仁（グローバル共生教育論コース）

■ 研究題目
芸術家の創造と学習 —ライフストーリーに着目した学習プロセスの分析—
■ 研究代表者・分担者 氏名
鈴木 理仁（グローバル共生教育論コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
目的 M：描いてないと自分が死んでしまう・・・。 このことは、アイデンティティの問題と深く関連しているように思える。つまり、芸術家のアイデンティティは「描かねば『死んでしまう』』というものである。個人が芸術家になるには、芸術家である、あり続けるためのアイデンティティの形成、変容、維持が不可欠である。そのためこれは、芸術家としてのアイデンティティの学習の結果であり継続であると考えられる。 芸術家のアイデンティティに関するこれまでの研究は「創造性」と「キャリア形成やスキル」の2点から考えられてきた。特に創造性に関しては、その内容が曖昧なまま、芸術家のアイデンティティと暗黙に関連づけられて論じられてきた。しかしながら、創造性と芸術家の自明的な関係こそが問い直されるべきであり、芸術家にとっての創造の意味を改めて論じることが肝要である。そしてそのことは、芸術家のアイデンティティに関連していると考えられる。 再帰性は現代社会における自己の特徴である。アンソニー・ギデンズ（2021）は、絶えず再帰的に吟味し続けざるを得ない現代社会における自己を、「自己の再帰的プロジェクト」（ギデンズ、2021）と呼んでいる。ギデンズのアイデンティティ論は芸術家にいかにか当てはまるだろうか。ギデンズ（2021）によれば、ルーティンと実践的意識が存在論的安心を形成するのである。芸術家の M 氏にとって、ルーティンは芸術活動そのものであるということが出来る。しかし、そうであればなぜルーティンに取り組んでいる

はずのM氏が実存的不安に直面するのか、という疑問が生じる。つまり、芸術家の創造は単なるルーティンとしてのみ捉えるべきものではないことがわかる。芸術家にとっての創造的行為は、ルーティン以上の意味合いを含むものであると考えられる。

つまり芸術家のアイデンティティの問題とは、アイデンティティの構築と自己の実存に関与する、芸術活動に特有の創造の諸問題である。こうした関心から本研究は、芸術家のアイデンティティに着目、ルーティンを超えた芸術活動の意味を探る。

このような芸術家のアイデンティティに関して、「学習」という観点から考察する。芸術家としてのアイデンティティを再帰的に構築する過程は、芸術家個人の学習の過程である。赤尾勝己(2017)に基づけばアイデンティティの絶えざる更新、構築の過程は学習として捉えることができる。

学習の過程としてのアイデンティティに関するこれまでの研究を以下に示す。

- (1) 社会教育研究では、アイデンティティの相互性という観点から理論的・実践的に研究を進めてきた(柳沢、2004)。
- (2) アイデンティティの学習は権力の観点から分析されている(松本、2019)。
- (3) アイデンティティの学習は状況的学習論において位置付けられてきている。実践コミュニティにおける正統的周辺参加の過程はアイデンティティ形成の過程である(レイヴ&ウェンガー、1993)。
- (4) 教育学だけではなく社会学においても蓄積されてきている。ベッカー(2016)は芸術活動を社会的関係性の視点から分析し、そのルーティンの相互作用の網の目からなる芸術の場を、「アート・ワールド」として明らかにした。アート・ワールドにおいては各参加者が関係性の中でルーティン的な協同を学習していくとされているが、その内的な学習に関しては検討されていない。一方で本研究は、芸術家自身のアイデンティティ形成の学習を明らかにしようとするものである。

以上の整理から本研究では、特に芸術家の学習という観点から、次の2つの点が重要であると考えられる。

- (1) 芸術家のアイデンティティ形成を、芸術家内在的に分析する。各々の芸術家が形成している特有の芸術家像に注目することは価値がある。

(2) 芸術家の学習プロセスを、長期的な視点に基づいて行う。特定の作品を生み出す前後に焦点を当てるのではなく、人生全体、生活全体の中での意味や関係性の変容を捉える。

以上 2 つの視点は、芸術家の再帰的で実存的な不安という観点で重要である。存在への絶えざる実存的不安に対応しつつ、芸術家が芸術家であり続けること、芸術家になることをめぐる学習とはいかなるものであるだろうか。

芸術家の「生」を問うということは、芸術家の存在を構築している手段と要素を明らかにすることであり、芸術家の存在論を問うことである。この「生」への問いは、大きく次の 3 点から構成される。

第一に、学習を存在論的に捉える立場は、アイデンティティの学習に関する分析視点を形成している（ジャービス、2020；Hyde、2021）。その中で Zhao & Biesta (2012) はギデンズのアイデンティティ論を批判的に検討しながら、自己形成のプロセスを検討している。しかし Zhao & Biesta (2012) では、道徳的善への接近の度合いが強調されているが、アイデンティティ形成に与える特定の影響を、道徳と表現することは正しいのであろうか。いくつかの研究（ウィリス、1996；南田、1998；松村、2021）に則れば、道徳的善も、特定の社会の場で形成される指標に過ぎず、道徳的善のみがアイデンティティ形成の方向づけを行うとは考えられない。本研究では、芸術家のアイデンティティ形成に影響を与えるものとして、Zhao & Biesta (2012) が提示したアイデンティティ形成の道徳的次元では不十分であると考え、芸術家のなかで共有される観念としての芸術観・芸術家観の形成に着目、そこから芸術家の存在論的な学習を検討する。

第二に、ルーティンを超えた芸術家にとっての創造の意味を探求する。

第三に、創造性と芸術家の関係を改めて整理し、芸術家の存在を証立てる創造の過程を明らかに。再帰的な自己形成が行われる過程としての創造を明らかにし、芸術家の「生」のあり方を示す。また、この再帰的な自己形成は近代化とともに増大する再帰性と同時に、すでに「終焉」（ダントー、2017；2018）のあとにある芸術そのものの再帰性の増大が関係する。

本研究では、芸術家への長期的視点に基づいたインタビューから、現代における芸術家の「生」の学習を考察する。本研究で対象とする芸術家は、芸術家ではない個人として生まれ、芸術家になっていく。芸術家という、特有のアイデンティティ形成の過程を辿った個人のアイデンティティのあり方を、生涯にわたる学習と創造という観点から明らかにする。

実施内容

調査対象者である M 氏は、活動を開始して 40 年以上が経過する油絵作家である（以

下、「」内は M 氏の発言から引用)。M 氏とは、報告者が 2 年以上フィールドワークを続けている宮城県内の X 画廊の個展の際に出会った。その後、M 氏が拠点としている東京都内の Y 画廊と、現在メインの活動の場として使用している K 県のアトリエに訪問し、合計 6 時間のインタビュー調査を行った。そのうち 4 時間 30 分がライフストーリーの聞き取りである。

発話内容は、(1) 芸術家としての学習に関して、「芸術家像」、「画廊と芸術家」、「作品制作のルーティンの性格」の 3 点、そして (2) M 氏にとっての創造に関わる学習を「M 氏にとっての創造」、「生きている創造」、「創造性と評価」の 3 点に基づいて分析した。

考察

本研究で得られた知見を以下に示す。

(1) 芸術家の実践コミュニティ

近代における自己は「再帰的プロジェクト」(ギデンズ、2021、p60)として捉えられる。加えて、近代以降においては、芸術活動そのものが芸術家に再帰性を要求する行為となっている。こうした二重の再帰性の中にある芸術家の取り組みにおいて、芸術家としての存在論の拠り所はどこにあるのだろうか、というのが本研究のスタートである。その拠り所の一つとして、本研究では実践コミュニティ(レイヴ&ウェンガー、1993)の議論を援用した。芸術家の実践コミュニティのあり方として、調査の結果明らかになった 3 点を、以下に述べる。

まず第一に、芸術家の実践コミュニティは実践を共有する実際の行為集団で形成されるわけではなく、それぞれの行為者の観念上で形成される。各芸術家の実践コミュニティは各々の芸術家観など、現在に至るまでの学習の結果形成された中心性を基点に形成される。

第二に、芸術家にとっての実践コミュニティは、現在という時間的平面で捉えられるものではなく、時間的空間的広がりを持った螺旋的ドーナツ形状であると考えられる。参加者は通歴史的な土台の上に成り立つ芸術家の実践コミュニティにおいて、伝統や「規則」(ベッカー、2016)との再帰の中で、自身にとっての中心性を構築していく。実践コミュニティは所与のものではなく、学習の結果としてそれぞれの芸術家が構築することになる観念的なものである。

第三に、実践コミュニティにおける中心性の構築や、そこでの学習者の正統的周辺参加(レイヴ&ウェンガー、1993)を支援する「メンター」(Merriam et al, 2003, p178)は、他の芸術家ではなく画廊である可能性が高い。芸術家である M 氏の重要な方針は、Y 画廊での 2 年に一度の個展の開催である。この個展の存在が、M 氏の芸術家としてのアイデンティティの継続性を維持している。芸術家にとっての実践コミュニティは他の

参加者ではなく、画廊などのアート・ワールド（ベッカー、2016）の住人が多層的に組み込まれた関係性の網の中にある。

（2）再帰的創造と葛藤

M氏は、東日本大震災発生後に、日常的な芸術活動として創造を行い、日常の感覚を取り戻している。しかし、日常感覚の喪失と回復に遅れて、M氏の芸術活動には意図しない変化が現れた。その期間に描いた油絵は、色を失ったモノクロームであった。M氏にとっての創造は、ルーティンの側面を越えた意味があることが確かである。本研究ではその側面を、ひとまず偶発的側面と名付ける。

M氏にとって創造は、「潜在意識」を「顕在化」させる無意識のプロセスである。この無意識のプロセスである偶発的側面は、創造の「再帰的側面」と言える。創造の「再帰的側面」は「規則」（ベッカー、2016）や技法との馴化や熟達などによる制約を、芸術家が暗黙に受け入れることで成立するものである。無意識の過程の中にある「再帰的側面」は、こうした制約による暗黙の方向づけを伴うため、完全な無秩序のもとにあるわけではない。

創造の「再帰的側面」を成立させるための要素である芸術家のパースペクティブは、芸術家であるM氏の人生を通じた再帰的学習の中で形成される。そのため、創造の「再帰的側面」と芸術家の人生を通じた自己形成は、常に再帰的な循環の中にある。

個人的な学習ばかりがこの再帰的な循環を形成する土台になるわけではない。歴史的土台や、個人的かつ社会的に構成される伝統的芸術家観との再帰が行われ、それらを「土台」として、今を生きる自分を通して表現されるものが「創造的」なものである、とM氏は語る。

また、M氏にとっての創造の「再帰的側面」は、M氏の「生命活動」そのものである。したがって、M氏の「生」の実感、過程としての創造の無意識の中にこそ、色濃く顕れるものである。M氏の「生命力」は、創造の過程のなかに「定着する」。よってM氏にとっての創造とは、過程の中にある、秩序に基づいた混沌としての「生」そのものである。M氏は自らの無意識が形作る芸術作品を通して、すなわち再帰的に自己を映し出し、芸術家である自分の実存を確かめているのである。

しかしながら現代において、芸術家は経済的要請から自由ではない。したがって、本質的には過程の中にあるとされる創造性にも、その創造の結果としての作品に対する価値の評価が行われる。M氏は、自分にとっての創造をきちんと評価できる顧客に購入して欲しい、しかし本来望まない経済的評価も受け入れざるを得ない。その葛藤は「行ったり来たり、もやもや」したまま、M氏の芸術家としての自己を形成していく。

M氏は絵が売れるかどうかということ自体、「芸術家にとっては大きくない」と述べる。このような芸術家像は、現代的なものだろうか。M氏が構築する芸術家像は、歴史

的に生産されてきた伝記的芸術家像にも影響を受ける。通歴史的な中心性というものは、それが継承されてきた歴史の中に存在し、市場の発展した現在の芸術活動の実践では決して中心性へ接近していくことのできない蜃気楼なのかもしれない。その葛藤が、芸術家にとって「死んでしまう」ような実存的問題を引き起こす一つの要因と考えられるだろう。

画家はとうに、その過程としての創造性を剥奪され、結果としての創造性による歪な期待に取り込まれる途上にある。無論、生存のために必要な、結果を評価されるための創造は不可欠である。今一度強調するが、芸術家の創造性とは過程そのものである。芸術家の「死」は、芸術家にとっての創造性の本質と葛藤を、我々に提示しているように思える。

今後の課題

- (1) Covid-19 の蔓延もあり、本研究で十分な調査が行われたとは考えられない。
- (2) 画廊の役割に関する課題が残る。本研究では、学習を支援する存在としての画廊の意義が確認できた。画廊は芸術家の人生に有意義な関係性を構築する結節点としても考えられるが、その関係性に現れる権力作用をより詳しく述べる必要がある。M氏はY画廊との関係性が良好である。したがって、M氏はY画廊での学習がスムーズに行われ、またY画廊側も、助言やアドバイスが比較的素直な形で受容されていると言える。しかし、多くの場合このような良好な関係が築かれているとは限らない。
- (3) 社会的に大きな意味を持つ経験が、芸術家のアイデンティティに及ぼす影響について、課題が残る。2011年の東日本大震災では、芸術家たちのアイデンティティにも、大きな影響を及ぼしていたことが観察できる。今後、こうした社会的惨事に着目した芸術家の研究が求められる。

参考文献

- 赤尾勝己 (2017) 『学習社会学の構想』 晃洋書房。
- ウィリス、P (熊沢誠・山田潤訳) (1996) 『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗 労働への順応—』 ちくま学芸文庫。
- ギデンズ、A (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳) (2021) 『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会—』 ちくま学芸文庫。
- ジャービス、P (渡邊洋子・犬塚典子・Pジャービス研究会訳) (2020) 『成人教育・生涯学習ハンドブック—理論と実践—』 明石書店。
- ダントー、A、C (佐藤一進訳) (2018) 『アートとは何か—芸術の存在論と目的論—』 人文書院。

- ダントー、A、C（山田忠彰訳）（2017）『芸術の終焉のあと—現代芸術と歴史の境界—』三元社。
- ベッカー、H、S（後藤将之訳）（2016）『アート・ワールド』慶應大学出版会。
- 松村淳（2021）『建築家として生きる』晃洋書房。
- 松本大（2019）「ある NPO 実践者の『生』と学び—障害と NPO をめぐる権力関係に抗して生きること—」『教育のあり方を問い直す—学校教育と社会教育—』東信堂、pp108-137。
- 南田勝也（1998）「ロック音楽文化の構造分析—ブルデュー〈場〉の応用展開—」『社会学評論』49 卷 4 号、pp568-583。
- 柳沢昌一（2004）「アイデンティティ・相互性の視点」『講座 現代社会教育の理論Ⅲ 成人の学習と生涯学習の組織化』東洋館出版社、pp44-60。
- レイヴ、J／ウェンガー、E（佐伯胖訳）（1993）『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—』産業図書。
- Hyde, B. (2021) . Critical Discourse and Critical Reflection in Mezirow’s Theory of Transformative Learning: A Dialectic Between Ontology and Epistemology (and a Subtext of Reflexivity Mirroring My Own Onto-Epistemological Movement) . *Adult Education Quarterly*, 71 (4) , pp373-388.
- Zhao, K., & Biesta, G. (2012) . The Moral Dimension of Lifelong Learning: Giddens, Taylor, and the “Reflexive Project of the Self”. *Adult Education Quarterly* 2012, 62 (4) , pp332-350.
- Merriam, S. B., Coutenay, B., & Baumgartner, L. (2003) . On Becoming a Witch : Learning in a Marginalized Community of Practice. *Adult Education Quarterly*, 53 (3) , pp170-188.